

言葉を駆使する文化

大塚朝美

先日、チャリティーも兼ねた食事会に出席した。その食事会は不定期に開かれており、その季節に誕生日を迎える人たちが中心になって設定する、という手筈になっている。主に英語のネイティブスピーカーたちが主催している会で、今回の参加者はネイティブが 7 割を占めていた。その日は 10 歳の息子連れのアメリカ人親子と席が対面となり、親子の会話を聞くことができた。

とにかく驚いたのは、父親が息子に何でも説明を求めるところだ。募金の封筒が回ってきた時、千円札を入れたお父さんからの「千円札には誰が描かれているの?」という問いかけから始まり、息子が「ノグチヒデオ!」と答えると、続いてどんどん質問が続くのである。「野口英世は何をした人?」「彼は医者で、細菌学者だよ。」「どうしてそのことを知っているの?」「本で読んだんだよ。」「どんな種類の本をよく読むのかな。皆に話してあげて。」このように、お父さんは話題が変わるごとに息子に「それはどうしてなの?」「皆に説明してあげて。」と言い、息子に最大限に話をさせようとしていた。子供に対して多くの問いかけをし、説明する練習をさせている様子を見て、ああ、言葉を駆使する文化に生きる人たちの教育はこうも違うのか、と思った。日本はハイコンテクスト (high context) 文化だと言われている。ハイコンテクスト文化とは、文化人類学者の E・H・ホール理論における文化の区分の一つで、「コミュニケーションに際して共有されている体験や感覚、価値観などが多く、「以心伝心」で意思伝達が行われる傾向が強い文化のこと」(Weblio より) である。日本の文化はまさにハイコンテクスト文化であり、言葉よりも以心伝心を重んじる文化である。その場の空気を読めないと、「言わなくてもわかってよ!」と逆に叱咤されることもある。それに対してアメリカなどのローコンテクスト (low context) 文化では、背景を共有していないことが前提であるため、「言語により論理的に説明しないと意図が伝わらないことが多い」(Weblio より) とされている。そのため、ローコンテクスト文化では幼いころから自分の言葉で考えを説明する訓練が普段の生活の中で行われているのである。

私は自分の子育てを振り返り、自分の息子たちにあれほど説明を求めることがあるだろうか、と考えた。おそらく説明がうまくできないと、親が代わりに答えてしまうといった場面も多かったように思う。自分の言葉で自分の考えを説明できない状況は、大学の授業でもしばしば見かける。ハイコンテクスト文化の日常生活において「なぜそう思うの?」「これを見てどういう感想を持つ?」「この事実に対してどう思う?」といった問いかけをあまりされることがなく、また自分はどう思っているのかを説明する練習をしておこなったことが要因であろう。日本に住み続けているならいいではないか、という意見もあるかもしれない。しかしながら、背景を共有していても言葉なしでは分かり合えないこともあり、言葉の力は多大である。言葉を学び教える私たちにとって、言葉を駆使して自分の考えを伝えられることの意味を言葉を通して生徒や学生たちに伝えることが必要ではないだろうか。

(大塚朝美 専任講師／教員養成センター)
